
醉迷宮

pinkmint

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酔迷宮

【Zコード】

N1708BA

【作者名】

pinkmint

【あらすじ】

自分の起こした暴力事件から、芸能人としての危機に立たされた青年。

彼が課されたペナルティは、いちど墮ちたら抜けられない

「秘密の花園」の接待を受けることだった。

巨悪の影を感じながら、主人公は迷宮の住人、異国の少女の手をとり未知の世界へ足を踏み入れる。

前作「墨といちじく」の続編です。そちらを知らないとこれ自

体で独立して読めるようにはしてありますので、まずは一話目だけでも覗いてみてください。刺激的な表現が多いですが、基本はプラトニッククラブ……のつもりです。

序章 ハニー・ガーテン（前書き）

（小説中に引用している讃美歌は一応著作権フリーを確認しております）

♪ 38459 — 1094 ♪

序章 ハニー・ガーテン

夕暮れ時、そのベッドに座ると、いつもきまつて窓から聞こえてくる掛け声があった。

マッシュヨゴーウ。マッシュヨゴーウ。

甲高い複数の女性の声。楽しげで、音楽のよつで、いつも同じ調子で。

ぱーーんぱーーんといつテニスボールの音が、あたりの建物に反響する。窓際のサンキャッチャーが、レースのカーテン越しに斜めに入る西日を受けて、虹のかけらのようなプリズムをまつしろな室内にばらまく。部屋のふた隅の花台におかれた白い陶器の花瓶には薔薇の花がこぼれんばかりに活けてあり、その花色が斜めの日差しを受けて白い壁にうすむらさきに映る。

部屋の隅に置かれたテレビの平坦な画面の中では、近く行われるライブの宣伝をする、人気歌手のインタビューが映し出されている。SYOさん、これが最後のライブといふことでのファンの方々も残念に思つてゐるのではないか?突然の発表ですが、これからは俳優業に専念といふ……。

いえ、その先のことは今は考え中です。新たなスタートとどうえていただければ。

百平米ほどの専有面積を全面改装したそのマンションは、応接スペースとかんたんなキッチンのほかはベッドルーム大小二つに小さな洋室、広いバスルームで構成されており、ベッドルームの一部始終はその洋室からモニターでチェックできるようになつていた。

部屋のドアが開く音がする。ベッドに腰掛けて一心にテレビに見入つたまま、少女は振り向かない。入ってきたのは細身を黒のニット

トで包んだ、頬に傷のある、顎の尖った男だ。

少女の背後から、男の細い手が伸びて、いつも田隱しで無造作に田を覆う。柔らかな布の肌触りとともに、視界が闇に閉ざされる。いましがたまで見ていた画面の向こうの青年の美しい面影が、田の内側に残る。

「いいですね。若いお嬢さんたちは、楽しそうで、男がぽつりとつぶやく。

マンションの向かいは良家の子女が集う有名な女子大で、テニスコートの横はチャペルになっていた。

「なんていってるんだろう、あれ」

「もいつちょいこーう」

少女は小声で歌うように答えた。

「なるほど。いつも聞いてるからわかるんですね。羨ましいですか？」

少女は下を向いて首を左右に振った。

呼び鈴が鳴る。

「さて、おいでだ」

男がテレビのスイッチを消す。

いつも無感動な男の声は、群青のびろつどのような感触を耳に残す。その耳にゴム製の耳栓がきつく刺し込まれる。これで視覚と聴覚を奪わることになる。残るのは、触覚と、嗅覚。

よりどころのなくなつた体が少ない情報にしがみつく。ふたつの感覚が急に鋭敏になつてゆくのが自分でもわかる。

……あ。

柑橘系の、それでいてどこかスパイシーな、シプレの香りがする。お香をも思わせる、和的で落ち着いた香り。のびやかで、たおやかで、それでいて芯のある、大人の女の香り。

ふわりとふわりと周りの空気が動く。服を脱いでいるのだろうか。

少女は薄い絹の、薄桃色の夜着を一枚、素肌にまとつていいただけだった。

指の感触が首に触れ、なにかベルベットの首輪のよつたものが首に巻かれた。

ふいに、耳栓が外される。

「こんなものがあつたらお話しできないうわ
やはり、女のひとだ。遠くのほうから、いいんですかと男の声がする。

「いいのよ、そりへんはひらの自由でしょ。わたしの常連さんと違つてそんなに有名人でもないしね。もうここからあつちに行つてちょうだい」

声のほうに首をめぐらすと、首輪についた鈴がちりんと鳴つた。

「かわいいわ」

指が、ベッドに座つたままの少女の夜着の前開きのボタンをすいすいと外してゆく。するとすると縄が体を下りて行き、素肌に空気が当たる。テニスボールの音は止み、聖歌が聞こえてきた。

「いい環境ね」

足首にも同じものが巻かれる感触がある。

「立つて」

立ち上がると、ぐく自然に服はすとんと足元に落ちた。手を添えて、縄のかたまりから女が少女の足を抜く。足首からもしゃらんと軽い音がする。

下着をつけていないので、身にまとつてこるのは鈴つきの首輪と足輪だけだ。

ああ、自由になつた。

少女はいつも思つ。身にまとつているものには、それがどんなものであれいつも抵抗があるのだ。なにもかも脱ぎ捨てて、ああ、これで自分はささやかに自分だけになつたと思つ。

「なんてきれいなの。しなやかで、猫みたいな体ね」うつとつと、シプレの香りの主が言つた。

「いつも男たちにこじりこわれてはいるんでしょう。今日はあなたのしたいようにしてあげるわ。してほしことを言つてひょうだい

「してほしいこと……」

少女は首をかしげて考えた。そんなことを言われたのは初めてだ。女の手が髪に触れ、高い位置で留めていた髪留めを外した。アップになっていた髪がほどけて背中にふさりと落ちた。

「背中を撫でてください」

「……背中を？」

表皮の冷たい、ふくよかな腕が少女の体に回された。薄いサテンのような柔らかい布の、胸元のフリルが少女の乳首をくすぐった。ふるりと、体の芯が震えた。

女の手が少女の背中を滑る。なめらかな背骨のラインに沿って掌がゆっくりと上下する。五本の指が広がって、何かの楽器を奏でるようにやさしくそれぞれの線を辿る。その感触の優しさに、少女の奥にある何かの琴線が切ない音で鳴った。

「いい子ねって言つてください」

少女は含み笑いをすると、少女の耳元に口を寄せた。

「いい子ね」

「……たくさん」

「いい子。ほんとうに、お前はいい子」

しつとりと、瞑想を誘うような深い香りが少女を包む。

少女はそっと女の背に手を回して胸に顔をうずめた。

「いい子よ」

少女は少女の頬に唇でふれた。少女は顔を動かし、その唇に自分の唇を寄せた。かるくふたつの吐息が絡まり、そしてすっと離れた。

「もう、どうしようかしら、この子」

少女は感に堪えないといつ風にしつぶやくと、そのまま少女の体を柔らかなベッドの上にゆっくりと倒した。

綿糸のような髪をもみくしゃにしながら、今度は小さな花の蜜を吸い取くせうとするように、薄紅色の唇に自分の唇を重く重ね、舌で口内を弄る。少女の口内は春の青草のようにな香り、きれいにそろつた歯が開いて優しく女の舌を受け止めた。

「そんなにかわいらしい注文をするような子が、こんなお仕事をしてるなんて、胸が痛いじゃないの。あなたを幸せにしてあげたくて、この身がはちきれそうだわ」

そつと唇を離して呟く女の息からは薄荷煙草の匂いがした。ちりんちりん、しゃらんしゃらんとかすかな鈴の音が室内に響く。

音は視覚の記憶を刺激する。突き上げる錫杖の先の遊環、猛々しく首を振りながら舞う獅子の首の鈴の音、火花を散らす爆竹と銅鑼の音、闇を切り裂いて青くうねる夜光龍の残像、窓辺に下がる赤い唐辛子の飾り物。

少女はどんな目に遭わされるのも、別に嫌いでもいやでもなかつた。

外に出ている部分でも体内の部分でも、女としての器官を、何の感情も載せずに刺激され、蹂躪され、あるいは貫かれることが、いやではなかつた。

どこにおいてあるのかわからない心と体が瞬時につながる、奇跡のような瞬間。どこにも届いていないのに、何かに届いた気がする、自分の生に手を伸ばしてつかめた気がする、あの目もくらむような快感。まずしい精神をおきざりにして自分は肉となる、そしてすべてから許されて自由になる。たとえ錯覚であつても、その瞬間が嫌いではない。

でも。

背中を滑る手が触れるのは、もっと奥。記憶とか感傷とか、寂しさとかせつなさとか、そういうもの。ひとすべりするたびに、何かの痛みのスイッチが入る。ひとの指にはいつも、魔法が宿る。肉の奥の鼓動とシンクロした瞬間、それは秘密の箱を開ける鍵となる。いい子、いい子、お前はいい子。そうくりかえしいわれたのはいつのことだったろう。あれは誰だつたんだろう。

無限に許されて自由だった、誰かのことがただ大好きだった。その記憶が、毎日思わない日はないテレビの向こうの愛しい人への焼けるような思いとないまぜになり、内側から身を焦がす。会いたい、

あのひとに会いたい。

少女の背を滑っていた手が、前に回り下に降り、ささやかなへその窪みを通過して、その下の茂みに埋められた。

少女はちいさな声を上げて、弾けるように背をのけぞらせた。

「やさしいひとはこれでおしまい」

左右に振るその首の鈴のがちりんちりんと鳴った。

讃美歌は、まだ続いている。

「今日は爪を切ってきたのよ、あなたのために。

あなたを知ると後戻りができないなるといつひわざを聞いてきた

の。素敵じゃない。楽しみだわ」

……ありがとう。わたしは許される。

もつと来て。わたしは肉になる。

そしてわたしの鍵を開けたら、今度はあなたを帰さない。

よつひやマダム、ハニー・ガーデンへ。

……まぼろしの影を追いて うき世にさまよい
うつろう花にさそわれゆく 汝が身のはかなさ

春は軒の雨 秋は庭の露

母はなみだ乾くまなく 祈ると知らずや

おさなくて罪を知らず むねにまくらして
むずかりては手にゆられし むかしわすれしか

春は軒の雨 秋は庭の露

母はなみだ乾くまなく 祈ると知らずや

ボンベイ・サファイア・ブルー

「リアンダー、アーモンド、リコリス、オレンジピール。薰り高い草根木皮から抽出された香りが、花に近い芳香となつて体内から鼻腔へ抜け、胃に小さな陽を灯す。

陽は無数の小さなともしひを全身にゆるゆると運び、まだやれる、大丈夫まだいける、行こう、前へ行こうとやさしく語りかけてくれるのだ。

この薄青い綺麗な液体を敵視する理由がどこにあるだろ？

SYOJIはボンベイ・サファイアの栓をきゅっと締め、紙袋に入ると個室のドアを開けた。

トイレから出ると、一千人収容のホールの方向からマイクのハウリング音が響いてきた。不機嫌な鉄の箱はわんわんと音を反響させ、テストテストというスタッフの声が、きょうが何の日か、だるい頭に念を押してくる。

この音を聞くのも今日が最後。

ばしばし頬を叩いてから控室の扉を開けると、マネジャーの哲夫がノートパソコンから顔を上げた。

「長いトイレだつたな」

「とつといで」

ぐしゃりと口を握りつぶした紙袋をSYOJIがぞんぞんに渡すと、中を覗いた哲夫が呆れた声を出した。

「おい、……ひい」

「四十七度」

唇に薄い笑いを浮かべながらそういうビールのソファに腰を下ろし、SYOJIは長い足を投げ出した。

「ちょっと景気づけにひっかけてきた。手元にあると誘惑に負けちまう。さすがにちびちびやるにはきつこい度数だし、預けることにす

る

「捨てるぞ」

「どうぞ」

SYOJIは天井を見上げた。

「それは俺の首輪につける縄みたいなもんだから。ほどいたら最後、金輪際どの収容所にもひきずつていけやしない。」

大丈夫、ライブが終わればジンに頼るのもやめるよ

「順番が逆だらう、ライブの間こそやめるべきじゃないのか。収容所つて、ステージのことじゃないだろうな」

「違う。そのあとのお勤めの話」

「……あれか」

小声で言うと、哲夫は紙袋を自分の鞄にしました。

「まあ、その話はやめよう。社長だつて本当はあんな羹接待は止めたかつたんだ、最後まで回避の方向を探してた。それはもう必死に。だが、もうどうしようもなかつた」

「わかつて、全部俺が撒いた種だ。……全部、俺が悪い」

哲夫は、仰向けになつて天井を見ているSYOJIに向かつて言った。

「俺は正直残念だよ、音楽活動停止つていうのはな。これだけはつづけさせてやりたかつた。歌つてお前を見るのが好きだつた」

目を閉じたまま、SYOJIは口を開いた。

「いつかこんな時が来るとは思つてたんだ。どんなことにも、始まりがつて、終わりがある。一日も一十四時間ワンサイクルでいちいち終わりが来るから、人間は次の日も生きられる。来世がほしいとは思わないけどね。」

正直、勢いだけでここまで来られるとは思わなかつた、自分としてはもう限度だ。幕を降ろすにはいい機会だよ」

哲夫はレモン入りのミネラルウォーターの入つたシャトルの蓋を開けてSYOJIに手渡した。

「……お前と初めて会つた時、あれはもう四年前か、歳のわりには

結構大人びてると思ったよ。でも今思えば、あの時のままいくつになつても成長してないともいえる。お前は年の取り方がいびつだな」
SYOJIは喉を鳴らしてレモン水を飲み干した。

「ああ、……美味しい」

「少しはアルコールは抜けたか」

口元を拭ぐと、SYOJIは哲夫に人懐こい笑顔を向けた。

「今回のことでは事務所のみんなに迷惑かけっぱなしだったからね。来た観客全員にこれが最後と信じたくないと思わせるようなライブにするよ。特に、一番世話になつた北原哲夫氏のために」

「……そりゃあ光榮だな」

「さて、と」

シャトルを哲夫に投げ返すと、首と肩をぐるぐる回し、ぱんと音を立ててSYOJIは控室のドアから出て行つた。廊下から、バンドの連中と朗らかに挨拶している声が聞こえてくる。

哲夫はしばらく時計をながめたあと、ステージ脇に回り、袖から舞台上のSYOJIを見つめた。

サファイア・ブルーの光に彩られて浮き上がる横顔は、名工の手で彫り上げた彫刻のようで、何度見てもそのたびに感嘆せずにいられない。

……お前はときどきさつきみたいに、胸がうずくよつな笑顔を見せる。それがどれだけ破壊力を持つか、今まで一度も自覚したことがないような顔をして。

「……そこそこはサス残しでいきたいんだ。ソロのドラムの敦に光残して。で、三曲目との間はクロス・フェードだら、光も途絶えないよ。シーリングスポットはそこ青めでよろしく。で、スクリーン換える間に紗幕降ろす、そのタイミングが昨日は遅かつたよね。ちょっとそこまで通しでやつてみて。あとポップノイズがひどいのが気になつた、ちょっとタカさん、その位置でタチツテト言つてくれない。マイクとの距離の見当つけたい。で、位置決めた

「うう」として（＊）

ううして見ると、素直で健康なただの青年だ。

……こいつが見てくれの通りであつたら、あんなことは起きなかつたのに。

それにしても、ひとつキャリアを失おうとしているといつのに、妙に清々しく、そして漂う気配も暗くない。こいつはもうほかの何かに照準を定めたのか。それとも何も考えていないのか……

哲夫の耳に、三週間前SYOからかかつてき電話の、切羽詰まつた声色が蘇る。

あの大失態の落とし前としてライブを今回限りで打ち切ると決められたとき、読めない無表情の中に、何かほつとしたものがあった。

嵐のようだつたあの一夜、彼は何を失い、何を見つけたのか。とにかく、このステージが、彼がどうしても失いたくないものでなかつたらしいのは確かだ。

最初からそうだつた、社長が彼を連れてきたときから、ギターを抱えてはいたものの、どこへ向かつたらいいのかわからないといつ顔付きをしていた。

有名になりたいかと聞かれ、金が欲しいと素直に答えた。

社長は笑つて、必ず稼がせてやると言つた。

そしていま、その通りになつた。……だが。

彼が手にした招待状が、どれだけやつかいな世界への入り口か、たぶん自分よりも社長がよく知つていて。ちくしょう、ちくしょうと呴きながら、社長が頭を抱えているのを初めて見た……

……哲夫は胸の中で、端正な横顔に呼びかけた。

SYO。

今日で歌手としてのお前は終わる。だが、そのほかの分野でもしろ人気の出過ぎたお前には大した痛手ではないだろう。

しかし、お前が明日向かわねばならない場所がどれだけやばいと
ころか、詳細をきかされていない自分にも気配で伝わってくる。

今日は歌え。そしてそののち、ビックリしたり、……とにかく帰
つてこい。

俺は見たい。この世界を泳いで、お前が最終的にビックリの面みく向
かうのか。

ポンベイ・サファイア・ブルー（後書き）

*バニル …… ステージ上の位置をテープなどでマークしておく

話は三週間前にさかのぼる。

その夜、三月にしては寒すぎる雨が梅の花を散らし始めていた。ツアーファイナルの最後を飾る東京ライブを三週間後に控えて、SYOJIは赤坂のスタジオでのセッションを終え、どこかでビールと動物性脂肪質でも補給しようかとツアーバンド仲間と話しかけていた。

「下に、……また、来てるみたいだけど

自販機に飲み物を買いに行っていたギターのダイが、戻ってくるなり口ごもりながらSYOJIに耳打ちした。一瞬息を止め、SYOJIはため息交じりにつぶやいた。

「……参ったな」

手早く帰り支度を整えてエレベーターで一階に降りる。ホールの隅の自動販売機の横で、バーバリーロンドンの膝丈のトレンドコートに黒い革のブーツの女が、壁に背をもたせかけて携帯を覗いていた。

立っているだけで目立つのは際立つたスタイルのせいだ。ダークブラウンのロングヘアが緩やかなウェーブに小雨のきらめきを乗せて半分顔を隠している。

「詩織」

小声の呼びかけに顔を上げると、女は少し笑った。

「今日はきみも仕事だつて、なかつたつけ」

「もう済んだわ、簡単な撮影だもの」

「で、何の用」

「私物を取りに行きたいのよ。あなたの部屋にわたしのもの、まだいろいろあるし」

「じゃあ送るよ。どうに迷わないでいい。実家？」

詩織は少しため息をつくようになると、黒田がちの田でSYOJIを見上げた。

「……冷たいのね。今ホテル住まいだし送られても困るわ。自分で選びたいの。いらないものはあなたが捨てるか使うかして。それとも新しい女でもいて来られると困るの？」

「今いないよ、そんな暇もないし」

「わたしも、ただ私物を引き取つてけじめをつけたいだけ。さくつと、いいよつていいなさい。いいじゃない、それぐらい」

なし崩しにいつの間にかタクシーの後部座席に並んでいた。

伊藤詩織。有り余る程の金を持ち、お嬢様大学の大学院に通いながら、モデル兼女優として最近名が売れ始めた、……一週間前に別れた女。

彼女のどこがよくて、飽きっぽい自分が一年も続いたのかよくはわからない。

だが、こうして並んで車に乗つていると、そしてその横顔を見ていると、言いようのない後ろめたさが胸に押し寄せて来る。

人生の転換期に立つっていた十四の頃、何度も自分を車に乗せては説教をしてくれた恩人の女性がいる。その面影に、ほんの少し、彼女は似ているのだ。

もちろん、偶然。そう、付き合つてから気づいたことだから、偶然。

お前が付き合つてゐるあの女のことだけ、と、私生活にはあまり口出ししない関岡社長が珍しく言い出したのは一月末のことだった。

……あの女が誰だかわかつてゐるのか。構成員が一万人を越える広域暴力団、権田組の組長の娘だぞ。

妾腹の隠し子とはいえ、その母親が早くに病死して不憫だからと金ばかりを与えた結果、手が付けられなくなつてゐるお嬢だ。暴力団規制法が施行されてから取り締まりが強化されてきた現在でも、なお権勢を誇つてゐる唯一の組だ。

いいかげん、現実を見て距離を取れ。あの娘はいろいろとヤバす

ざる。

そのころ、二人はよくけんかをしていた。たびたびできる顔のひつかき傷を見かねた社長が、今まで大目に見ていたSYOUの交際に口を出したのだ。朝顔の花が萎むように、そのころ、詩織の肌や気紛れな性分に対する興味も執着も枯れかけていた。

……もう終わりにします、ちょうど愛想を尽かされかけますから。そう答えると、社長は心からほっとしたような顔をして、そうかと笑った。

忠告を受けた翌日、SYOUは部屋で早速別れ話を切り出した。詩織は覚悟していたように、冷めた目で聞いていた。

……結局わたしのことなんか好きじゃなかつたのよね、はじめから。誰のことも好きになんかなれないくせに。

その通りだ、ごめん、俺には恋愛の資格がないらしい。だからちゃんと優しくしてくれるいい男を探してくれ。

率直にそう答えたら、いきなり灰皿が飛んできた。それから平手打ち。SYOUの載つている雑誌を本棚から引き抜いては泣きながら床に叩きつける彼女を見ていて、心の中で、ああまたこれが、とため息をついていた。

初めて一緒に食事したとき、飲んだのがたまたまびきり美味い酒で、酔いに任せて近くのビルの屋上に上がり、この世から爆弾で吹つ飛ばしたいものを叫びあつた。非常階段で知つてている限りの歌を歌つた。公園の池沿いの道を歩いていた亀を拾い、ケロリンの洗面器で飼つた。刃のように容赦のない彼女の物言いと、時折見せる子どものような笑顔が好きだった。

宝物を探すように、都会の片隅の、自由の片鱗を一人で拾い集めた。楽しかった。

彼女を見ていたかつたし、幸せにしたいと思つた。それが自分の都合でも、どこに根差すものでも、その瞬間の気持ちに嘘はなかつた。それでもいつの間にか一人の間に風が吹き始め、女が寂しい寂

しいと訴える回数が増え、それが重荷になつて関係は終わる。どうしていつもうまくいかないのだろう、自分も寂しいのは同じなのに。

「なんだかなつかしい、この匂い」

SYOJIのマンションの部屋に入ると、詩織はモノトーンを基調とした無機質な室内を見廻しながら言った。

「わたしがバリで買ったフランジパーの石鹼と、あなたのキャスターが混じりあつた香り。ついこの間まで住んでたのに、もう遠い昔のことみたい」

「……」

「服にね、この部屋の香りが染みついてるの。バッグにもよ。だんだん薄まつていいくのが切なくてね。マフラーなんて、洗えもしなけりや捲けもない。バカみたい」

黙つて突つ立つてているSYOJIを振り向いて、詩織は言った。

「警戒しないで、また住み着こつなんて思つてないから。でもひとつだけ聞かせて。わたしのこと、ほんとに、好きじやなかつた？」

「……いいや」

「最初は好きだつた？ 少しは思つてくれてた？」

それとも、わたしの親が普通の親だつたら、こんなことにはならなかつた？」

詩織が少しずつ置つてきては大事に水をやつしてきた鉢植えの花々が夜の窓辺に並んでいる。それを眺めながら、SYOJIは答えた。

「親がだれかなんて、俺には関係ない。」

昔から、好きつて感情がよくわからんのだ。誰かに好きだと言つうと、そのあと、その言葉に交じつてるかもしれない嘘が気になつて、申し訳ない気持ちになる。心の中が不純物だらけで、自分の本音がよく見えない。自分にそれを言つ資格があるのかとか、面倒なことを考えちまつ。

でも、一緒にいたいと思つたし、きみを見ると、……幸せだつた

詩織は田を細めると、ふうっと細いため息をついた。

「それを聞いたかったの。ありがと。」

楽しかったよね、ちょっとの間だけ。……わたしも、幸せだった

た

「つすらと涙の浮かんだ詩織の瞳は、愚かなことにこれまで一番きれいに見えた。

「ねえ」

「うん？」

「最後にキスして」

「……駄目だよ」

「そこで止める自信がないから？」

詩織は微笑みを含んだ田で見つめながら、SYOの腰に手を回した。

「あなたの帰りをここで待ち続けて、死にたくなった夜がいくつもあつたのよ。

退屈しのぎにネットを開いたら、SYOと女優Eがホテルのバーなうとかツイッターに爆撃されて、部屋に火をつけたくなったことも。

それを全部がまんして、おまけに忘れてあげるっていうんだから、ひとつくらい置き土産をくれてもいいと思つ

SYOの頬を両手ではさみ、詩織はきゅっと田を閉じて唇を突き出した。付き合いで度に唇で触れると、こきなり力を込めてSYOの頭を抱え、まるで息の根を止めようとするかのように強引に唇をむかせる。思わず田を閉じて、無意識に上がった両手を、いつもの動きをなぞるように詩織の背中に回していた。

「……好きだったのに。本当に、好きだったのに。あなたはびっくりも、わたしは本当に、本当に……」

「……ごめん」

恋というものが持続を求められるものではなく、ただ今、その刹那の深さだけではかれるものならば、自分は何度もきちんと、心か

ら人を愛したのに。そのつもりだったのに。永遠だと思ったものはいつもあつという間に形を変えてゆき、その変化を誤魔化す自分が自分にはできない。こうして、涙に濡れた頬を胸に押し付けられても、時間は戻せない。

それでも、自分の内部に行けばいくほど温度の下がる冷えた精神構造の中心に、その夜はめったに灯らない灯りが灯っていたとSYOJIは思う。彼女の悲しみと自分の空洞を共に満たすという未知の衝動に導かれて、今までにないぐらい腕に力を込めて彼女を抱きしめていた。

嬉しい、とかされた女の声が耳に切なく響いた。

優しくして、お願い。最後だけ、もつともつと優しくして……

翌朝、皺の海に埋もれそうになりながらシーツの中で畠を覚ますと、身支度を整えた詩織が鞄に荷物を詰め込んでいるところだった。SYOJIの視線に気づくと、どこかぱつが悪そうに微笑みながら声をかけた。

「おこしちゃった？ まだ寝てていいのに」

「……」

一瞬置いてタベから今までのことを一気に思い起こし、SYOJIはただ、ああ、うん、……と間抜けな声を出した。

「寝顔が綺麗で見とれてたの。口をきくと、また未練が生まれるから、黙つていこうと思つてた」

「私物とか、整理は済んだの？」SYOJIは寝起きのかすれ声で尋ねた。

「ああ、結局服だけ持つていくことにしたわ。あとのものは適当に処分しといてね。あ、それから

詩織は左手でSYOJIを指さすと、右手の人差し指で自分の耳をとんとんしてみせた。

「お別れにもらつといたわ

「何を？」

「感謝料替わり。本当は別れたくなかつたのよ、わかるでしょ。でも未練は残さないでおいてあげる。いただいたものは、恋愛不感症のあなたへの罰」

SYOははつと自分の耳に手をやつた。

……ピアス！

「おこ！」

思わず大声が出ていた。

「おお、怖い。お隣の人が起きちゃうわよ」

「……ふざけるな。返せよー！」

久しく出したことのない低い声だった。語尾が震えているのが自分でわかる。

「たかがダイヤのピアスでしょ。一年分の感謝料と思えば安いものじゃない」

「そういう問題じゃない」

「じゃあどういう問題なの」

「あれはただのピアスじゃないんだ。金に代えられない唯一無二の思い出の品なんだ。マジで冗談じやすまない。とにかく返してくれ」「よつほど大事な女からもらったのね。じゃあ名前言つてくれたら返すわ」

「交換条件どこのじやない、ほんとに返せ。返してくれ、頼むから。女なんかじゃないんだ、あれは俺の……」

「あなたの、なに？」

「……蓋なんだよ」

「なによ、それ。蓋がなくなると何が出て来るの、その中から」

「詩織！」

SYOの怒鳴り声に、詩織はつんと顎を上げた。

「そんな大声で脅したつて返してあげない。何よ、昨日は天上の恋みたいに扱つてくれたのに、たかがピアスで気がふれたような顔しちやつて。そうね、また会つてくれたら、その時は考えてあげる

わ。でも、それ以上脅しつけるなら捨てりやつからね。いつでも電話ちょうどだい。じゃ、さよなら」

SYOJIはベッドサイドのガウンを乱暴に羽織ると、背を向けた詩織の手を乱暴に掴み、そのまま後ろに引き倒した。詩織は仰向けにベッドに倒れて、悲鳴を上げた。その耳に、ピアスはなかった。

「ピアスはどこだ！」

狂気のような表情のSYOJIに長い髪をわしづかみにされたまま、詩織はもがいた。

「痛い痛い、手を離して！人を呼ぶわよ！」

「言わないでこの部屋から出られると思つてるのか。ふざけるな。言え！」

男の豹変に、詩織の目も座り、冷たい光と涙をみなぎらせて怒鳴り返した。

「SYOJIのバカ！ 大つ嫌い。何よ、結局わたしなんてあなたにとつてはピアス以下のゴミ屑なんじゃない。いつも思つてた、あなたの目はきれいだけど底なしに冷たい、生糞の人でなしの目だわ。わたしがよく知つてるヤクザの目よ。

知らんふりして言わないであげたのに、あなたの秘密。わたし知つてるのよ、名前を変えて隠してるあなたの過去。言つてあげましょうか。

SYOJI、本名、柚木晶太。

たつた十四で、母親と共謀して実の父親を殺した……

「黙れ！」

ふわりと全身が熱に包まれ、すべてが現実感を失つた。

シアラトストラはかく語りき

哲夫が現場に着いたとき、すでに救急車が到着していた。
ああ、……やつてくれた。呼んじまつたか。
それが白い車を見たときの彼の本音だつた。

SYOJIから電話があつたのは朝の六時半だつた。

どうしよう、……気がついたら彼女が倒れていて意識がない。
彼女つて、詩織さんか？ お前、なにをやつた？

……わからない、蓋が、蓋が取れたから。

おい、蓋つてなんだ。大丈夫か。聞いてるか、SYOJI？

薬でもやつているのかと疑いながら、とにかく自分が行くまで応急処置をしていろ、とりあえず自分の車で病院まで送る、とだけ言つて車に飛び乗つた。外にばれるような騒ぎにする前に何とか抑える、それが優先順位の一番だつたのだ。

室内には倒れた鉢植え、割れた花瓶やショーデランプが散乱しており、ベッドの上には蒼白な顔のSYOJIと、その膝に抱かれてぐつたりしている伊藤詩織の姿があつた。顔面は血まみれで、小さな呻き声を上げながら右手をふらふらと動かしている。SYOJIはまだ混乱しているようで救急隊員の質問にもうまく答えられず、ただ助けてください、を繰り返していた。

とにもかくにも、生きている。それを確認して、哲夫はひとまず安堵した。

マンションの部屋は芸名で借りてはいなかつたので、SYOJIの住まいと知る住人はあまりおらず、それほど野次馬も集まらないうちに、彼女は病院に運ばれた。社長の指示でSYOJI自身は救急車には乗せず、哲夫が同行した。

打撲傷、頬の軽微骨折、脳震盪に鼻血、一時的な貧血。診断の結果は、見かけの深刻さに比べればましなほうだった。倒れたとき頭を強打したようなので、念のためにTスキャンをすることになった。

警察は来なかつた、マスコミに情報も洩れなかつた。というより、被害者の父親である権田組組長が止めたのだ。

その日中に父親の代理人から連絡があつた。

被害届は出さない。不肖の娘がアイドルに血道をあげて、痴話喧嘩のあげくに殴打されて入院したなどと、世間に知られれば恥をかくのは二ぢりだ。彼女の仕事にも支障が出る。見舞いにも謝罪にも来るな。

そちらにはそれなりのペナルティは負つてもらひ。ライブ活動は今回で打ち止め。だがこの事件を隠してきちんと最後までやること。娘と縁を切り、入院費、治療費、仕事のキャンセル分、慰謝料は払つてもらひ。そして、あとの話は別の場所で……

マンションと病院と事務所を飛び回つてゐるうちに、哲夫の一日は暮れた。

「いつかこういう時が来ると思ってはいたが、……」

ため息交じりにそういうと、関岡社長は黙り込んだ。

深夜の事務所の応接ソファで哲夫と並んで、SYOJIはただ俯いていた。ぼさぼさの茶髪にトムフォードの薄いブラウンのサングラスをかけた、「やつれ派手」とSYOJIが呼ぶ社長の容貌は、いつも若く見える彼にしては五十代という年齢相応に見えた。

「ピアスとやらが、そんなに大事だったのか。伊藤詩織がだれなんか分かつた上でこの所業か。おまえ、事務所ごと潰す気か」「すみません」

全く無表情な声でSYOJIは言った。長い沈黙がそれに続いた。窓の外は風俗店のネオンと駐車場の灯り以外は消えて、夜の街のにぎわいも静まっている。

「……今は特に、暴力団どんな形にしろかかわったことが表に出るとまずい。あちらがことを荒立てるのを避けたがっているのは不幸中の幸いだ。非は一方的にお前にあるし、お前の過去がらみであちらが強気に出でくるのは間違いない。まあ起きたことは仕方ない、目の前にはとりあえず最後のライブという仕事がある、それを大事にしろ。……気分を落とすな。できればだが……」

「いたん言葉を切ると、社長は声を落としてつづけた。

「お前にこういう傾向があるというのは、知らなかつたわけじゃない。そこを抑えられていたから、ここまで来れた。正直、今回は失望した。この先もこの世界で生きるなら、その性分を何とかしろ。ことが表沙汰になつて一番傷つるのは、お前を信じてついてきたファンだ。わかるか？」

「……本当に、申し訳ありませんでした……」

ゆつくつと、膝につくかと思つぐらじ深く、SYOJIは頭を下げた。

27

一人で応接室を出ると、SYOJIは老人のようにゆらりゆらりと不安定に歩き、廊下の突き当りまで行って立ち止まつた。そしてそのまま壁に体をもたせかけるようにした。

「おい、大丈夫か」

思わず肩に手をかける。返事はなかつた。エレベーター前の空間で、SYOJIは小窓の向こうの光の少ない夜景を見ていた。横に並んで外に視線を投げながら、哲夫は静かに語りかけた。

「お前さ、昔から結構アナーキーだつたよな」

「……」

「ライブ会場でノリに任せて服脱ぎ始めて全裸に近いとこまでいつたり、生放送で歌詞改造してとんでもない单語連発したり。お前の手をつかんで袖口まで引きずつたのもマイク止めたのもみんな俺だ。街中で酔っ払いに、連れてた女の子ごとからかわれていきなり殴り倒したのもあつたな」

背後から、SYOJIが眺めているガラス窓に手をつくる。

「それからあれだ、お前の叔母さんとかいうのが楽屋口に来てファンと小競り合になつて、どきなよおばんとか怒鳴られてた時、お前出てきてファンの……」

「もういいよ」SYOJIは小さな声でその先を押しとどめた。

「お前をここまで飼いならすのはなかなか大変だつたんだぞ。社長の落胆は仕方ない。だが今回は俺はお前に頭が上がらない気分だ。お前、自分の判断で救急車呼んだんだよな」

「…………」

「俺はあのとき、あきらかに詩織さんの状態よりお前のこれからを優先してた。だから救急車を呼べと言えなかつた。

彼女が氣絶しているだけなら、部屋に駆け付けて金を渡して示談にして、とかそんな都合のいい可能性に賭けたんだ。

「…………」こういう仕事してると、こんな人でなしな判断しかできなくなるんだな

「俺じゃなくて、ツアラトストラが呼んだんだ」「なんだつて？」

窓のほうを見たまま、SYOJIは歌うように言った。

「“おお、わたしの兄弟たちよ。あなたがたは豪胆であるか？目撃者のあるところの勇氣ではなく、もはや見ている神もない孤高の勇氣、鷲の勇氣をもつてゐるか？

冷たい心、驢馬、盲者、酔いどれを、わたしは豪胆と呼ぶことはできぬ。豪胆なのは、恐怖を知りながら、恐怖を圧服する者だ”」

哲夫は呆れたような顔をして聞いていたが、やがて口を開いた。

「…………なるほど、俺より前にそいつに電話してたのか

「そうだよ」

「なかなかいいことを言つやつだな。あとでツアラトストラにお礼しどこい」

SYOJIは哲夫に、少しほどけた表情を向けた。

「……ヒセビセ。自分が、狸御殿に住んでるような気分になるんだ」

「狸御殿？」

「花束を手にしたと思ったら、翌日には塵屑になつてゐる。ああ化かされたな、と思う。美女だと思つても、みんな狸。そんな気分」

哲夫は思わず苦笑した。

「で、どんな花だつたんだ、今回は」

「手にしたというか、最後に渡したつもりだつた。

……もういいや。身の程知らずなのはこつちだつたんだ」

薄暗い廊下の灯りの下の、鋭角的な横顔を見ながら、哲夫はその背をぽんと叩いた。

「それでも、たまには狸じやない女もいるだろ。見つけ出せよ、二ーチエの鷺の勇気について話し合える相手とかさ」

「一ヒーでも買って来るよ、と背を向けた哲夫を眺めながら、S YO Uの頭の中には、以前、その言葉を書き送つてくれた女性が付け加えた手紙の一節が踊つていた。

何かあつたら、思い出して。
何があつても、逃げないで。

いちど逃げたものからは、一生逃げ続けなければならぬのが人生よ。

晶太、離れても、わたしがここにいる。いつでも、あなたを見ているわ……

シリアルストラはかく語つき（後書き）

今更になりますが、途中から入つていらっしゃる方もいるかと思い
補足しておきます。

この作品は、前作「墨といちじく」の続編です。逆に言えば墨とい
ちじくは主人公の少年時代のものがたりです。

この連載そのものは前作を見なくても分かるように独立したつくり
にしてはいますが、合わせて読んでいただけるとの話の背景も
立体的に分かりやすくなるかと思います。

興味があつたら、覗いてみてくださいると嬉しいです。

ピンク・ホーネット

権田組組長、権田眞一郎に直々に呼びだされたのは、とある会員制クラブの個室だった。

高級クラブが立ち並ぶ銀座の通りに位置するビルの最上階、会員以外を寄せ付けない黒光りする分厚いドアに、クラブ・ホーネットと印字された銅板がはめ込まれていた。店名の脇に、スズメバチの小さなイラストが掘りこんである。

そのセキュリティ チェックは異常に厳しく、SYOJとマネジヤーの哲夫と社長たち一行も、個室に入る前に、全身を棒状の金属探知機でチェックされた。ピーストライプの細身の黒服を着たボイトイブニングドレスの美女が、きらびやかなシャンデリアの下で静かに行きかっている。だが、高級な革張りのボックス席にかしこまつて座る三人には、豪奢な牢獄のようにしか思えなかつた。

遅れて到着した権田眞一郎は、四十前後の肉付きのいい宝飾品だらけの女とボディガードを従え、店内の全員に深いお辞儀で迎えられた。組長が濃紺のゼニアのスーツに包んだ巨体をSYOJたちの向かい側のソファに沈めると、入室と同時に立ち上がりついた関岡社長はSYOJと哲夫とともに頭を下げて切り出した。

「申し訳ございません、このたびは誠に」

「お前はいい。おい若造、顔」

はつと顔を上げたSYOJの切れ長の目の人上に、深いくまの染みついた落ち窪んだ目が据えられていた。

鋭い眼光に射すくめられたまま、永遠とも思える沈黙の時が過ぎる。頭を下げたままの哲夫の首筋を冷や汗が流れ落ちた。

「阿呆と美男は使いよう」

一時が経ち、ようやくと組長は口を開いた。

「若いもんの情報に疎いこの私でもお前さんの名と顔はよく知つて

いる。なるほどこうして見ると作り物みたいな美男だな。あのバカ娘も悪いのに引っかかつたもんだ。今いくつだ」「二十一です」組長の視線を静かに受け止めたまま、SYOJIは答えた。

「突つ立つてないで座れ」

三人そろつて人形のように腰を下ろした。

「歌手でデビューしたんだつたな、だがこの顔なら役者かホストのほうが向いとるだろう。たらしこむのだけが特技なら。どうだ関岡とやら」

「……は、それは、お陰様で役者業のほうもいたた、いただいておりますが」

急に話を向けられて、隣の社長がどもりながら答えた。

「何やらあんたの歌はでたらめでよくわからん。あんなものでどういう経緯でデビューしてここまできたのだったかね。わかるように手短に説明してくれ、社長」

葉巻を取り出しながら自分のほうを見もせず女に火をつけせる組長に、社長はしじるもじろで語り始めた。

きつかけは学園祭だった。

名門で知られる国立大学のキャンパスの屋外ステージで、意味不明の歌詞を喚き散らして拍手喝さいを浴びていたSYOJIたちのバンドに、講堂でトークショウを終えて出てきた芸人が客席から絡み始めた。

「おい下手くそ。何言つとるか通訳が必要や。足こぎボートのハクチヨウが暴走して花見客虐殺で、そういう歌でええんか」

「最後に大空にはばたくんだから、虐殺じやなくて昇天でこつちやSYOJIは笑いながら口調を合わせて答えた。

「なんて歌や」

「はばたけぼくらのはくちょ「う」」

「あほか。お前頭おかしいやろ。よし、俺も歌詞付け足して歌うた

るわ」

ちょうどビデオレビュ局が入っていたこともあり、二人で即席の下ネタを混ぜ込みながらやんやの拍手を浴びた滅茶苦茶なデュエットは全国に放映された。芸人よりも多くの嬌声を集めていた見栄えのいいヴォーカルに、一斉に視聴者が反応した。その中に、立ち上げて十年目の芸能事務所がやつと軌道に乗り始めた関岡がいた。親元を離れて自活していたSYOJIは、金になるならと事務所への誘いに応じた。

現役T大生ということもあり、彼の名前と顔はすぐに売れた。即席バンドは自然解体し、SYOJIだけが唐突に芸能界の光を浴び始めた。

女子供が喜ぶような内容でもない、荒廃したグロテスクな歌詞にもかかわらず、彼の絶叫系の妙な歌い方は、その飛びぬけた容姿とのミスマッチが受けて一種のコミックソングのように受け入れられてしまった。バラエティ番組からドラマのゲスト、そして主役へ、気が付いたら彼は大学を中退し、知らない世界の中枢に横道から入り込んでしまったのだ。

ひととおり聞き終わると、権田は葉巻を唇から話して紫煙を吐いた。

「そのレベルの大学に入れる頭をしていながら、ピアス」ときで無抵抗の女を血だるまにする。素人さん相手に無駄な暴力をふるうような阿呆はうちの組でも使えん最低の屑だ」

SYOJIは長い睫毛を伏せて唇を引き結んだ。

「あなたの気がおかしいわけじゃないというなら、その飾りもんがそれほど大事なわけを、気の毒な女への伝言として説明する義務があるだろ?」

場は沈黙に包まれた。すべての視線が、SYOJIに注がれた。

「あれは、……猫です」

絞り出すよくな声で、SYOJIはぽつりと言つた。

「猫?」

「僕が十一のころ両親は別居しました。僕はそれから一年母と九州に住んでいたんですけど、その母が昔の男と家出して、身寄りがなくなつて十四の時叔母に預けられました。その叔母が飼っていた猫です。

その前に引き取つてくれた親戚の家からは追いだされていましたし、次はどこへ行くことになるのか、とても不安な毎日でした。僕にとても懐いてくれて、あのころ、あいつがいることで頑張れた「

妙な顔をしている組長の横で、連れの女が口を開いた。

「その猫は、……死んだのね？」

SYOJIは女を見ると静かに視線を落とした。

「僕がドアをあけっぱなしにしたせいで、僕を追つて外に出て、車に轢かれました。

叔母に頼んで骨を取つておいてもらつて、独り立ちできるようになつたら、ダイヤに加工して身に着けようと決めていました。ずっと一緒にいたかった。お守りがほしかつた。そうしないと、まともに生きられる自信がなかつた

「なるほど、それであんな変な歌でデビューを急いだのか。

悪いがピアスは紛失したそうだ。もつあきらめた方がいいな」

「……」

体の奥から寒気を伴つた震えが上がつてきて、泡のよじよじで弾けた。

一瞬で涙に変わりそうなそれを、SYOJIは歯を食いしばつて必死でとどめた。

「その、母親を連れ出した男というのが、当時あんたが手にかけた筋もんか」

「組長、どうかそのことは、ここでは……」

関岡社長が青い顔をして割つて入つた。

「別にかまわんだろう。あいつは俺の系列の組の薬を横流しして、金庫の金を持ち逃げした糞野郎だ、殺されて当然だ。あんたの母親を手に入れる前に女を一人刺して。あんたの母親も一緒に家出と

「いつより金づるとして拉致されたいたといふ話だし、警察と組から手配がかかつてどちらにしろ先はなかつた」

「……殺していません」

押しつぶしたよつた声でSYOJIは一言呟つた。

「ああ、逃亡しようとしているやつの車のフロントガラスを割つて阻止、お前がボンネットに飛び乗つて母親が男を撃つて結果的に、だつたか、まあ共同作業だな。十四にしてはよくやつた」

「……」

「だが奴は見てくれだけはいい男だつた。どつこつわけか今のお前さんそつくりの顔のな」

「もうやめておあげなさいよ」

隣の女がやんわりと組長を制止し、SYOJIに笑いかけた。

「ここの子はそちら辺の塵屑イケメンとは違うわ。その傷のぶんだけ、女の心臓を、直に虜にできる子よ」

その笑顔は何か別のが裏側から貼りついているようだ、美しいナメクジが女に化けたらこいつなるかとこいつなぬめぬめした女だと、SYOJIは思つた。

「さて。それ程の資質をお持ちならこれからは活躍してもらおうか。あんたみたいなどうせ使い捨ての芸能人の価値は、女どもの脳味噌をでなく、子宮をじれだけつかめるかが命だからな。

過去はきれいに清算して、今も2、3社とCM契約しているようだが、どんどん仕事を増やすといい。あんたは歌手というより役者向きだらう。私が手を回せばいくつかの企業が声をかけてくる、旬を逃さず片つ端から受けときなさい」

「は……？」

妙な展開にSYOJIは戸惑つた。

こいつは筋の口利きでスポンサーが乗るといふ話はここの「時世では現実的ではない。第一、好意でこんな申し出をする理由はあちらにはないはずだ。隣で社長がじつとと湧き出る額の汗を拭きながら頭を下げるのも」言つていた。

テーブルの下では澪子がすでに裸足になつた足を延ばし、SYOのオペラパンプスの靴を脱がせにかかつてゐる。困惑しながら顔を上げると、蜜柑が丸ごと食えそうな唇の両はじをくつと上げながら、足の先をそろそろと股間に近づけてきた。

SYOは小娘のように下を向いて膝の上の握り拳に力を入れた。

……どうしろというんだ。

「新たな門出を祝つて乾杯といこう」

個室のドアが開く音がした。

力チカチと音がして、シャンパンとフルートグラスを乗せたトレイが運ばれてきた。澪子はSYOの股間からそつとつま先を降ろした。

銀のトレイを持つのは、どう見ても十八よりは下に見える少女だ。長い黒髪をそのまま後ろに流し、耳の上に牡丹をかたどつた花飾りをつけている。身に着けている桜色のチャイナドレスの、豊かな胸の隆起の下を流れ落ちるようなほつそりとしたラインは、まるでそれ自体がシャンパンのフルートグラスのようだった。

伏し目がちの瞳はさやさやとした細い瞳に縁どられ、つんとした鼻梁と花の様な唇のバランスがいとおしくなるほど美しい。これまで見た女性の中で一番きれいな子かもしれないと、SYOは感嘆した。

「リン、彼が誰だか知つているだらう」

リンと呼ばれた少女は、そつと瞳を上げてSYOを見ると、はい、と小さく答えて視線を落とした。

少女は細い蠅細工のような手でSYOのフルートグラスにシャンパンを注いだ。小刻みに指が震え、液体がグラスから一筋こぼれた時点で少女はいったんボトルの口を上げた。

「失礼をいたしました、すみません」

「いや、……大丈夫」

笑顔を浮かべて少女を見守る澪子のほつからは、何かお香に似た香水の芳香が漂つてきていた。

「 」の子は日本人じゃない。台湾出身だ。日本語がうまいだろ。ある男に会いたくて、それだけのために勉強して、そして親も何もかも捨てて日本へ来た。けなげな子だ

「 ……すごいですね、若いのに。恋人が誰かに会いに、ですか」

権田は答えずに含み笑いをした。

ふと見ると、頬を上気させた少女の、アーモンド形の目にはうつすらと涙が浮かんでいた。シャンパンを注ぎ終わった少女はひとつお辞儀をすると、そのまま下がつていった。細い後姿をねつとりと見ながら権田は言った。

「 かわいいだろ？、こんな子がこいつクラブで海千山千にまじって働いとる。私の一番贔屓だ」

そこまで言うと、顎を上げてソファに座りなおした。

「 さて、あんたに頼みたいことがある。聞いてくれるかな」

「 ……はい」これからが本題だ。SYOJIは姿勢を改めた。

「 ちよいと最近このお姉さんが退屈しているようなのでな、話し相手になつてやつてもらいたいんだが。まあ君の母親に近い歳だろうからなじみのない年齢でもあるまい」

「 失礼な人ね、まだそこまでいつてないわ」

あるかなしかの薄い眉をひそめて女は笑つた。

「 私はこう見えても情深いタイプなんだが、あいにく体のほうが言うことをきいてくれんでな。大事な女たちに愛想を尽かされても困る。」いいつはいい女なんだが中でも一番欲が深くて手を焼いとる、ひとつ楽しませてやつてくれ。好みに合わないと寝首をかかれることがあるがな」

「 悪かったわね。でも、あなたのそばについて一番幸福を実感した夜だわ、きょうは」

「 まだそれを言うのは早かる」

SYOJIは心の中で大きなため息をついた。女はそつとテーブルの上に手を出すると、馬鹿でかいサファイヤの指輪をはめた指でSYOJIの手を上から撫でた。

「女冥利に及ぶるわ、夢のようよ。でもあなたのほうはそうでもないでしょ。だから私からもお返しにプレゼントをあげるわ。花園への招待状よ」

「花園？」

「私が味わった極上の蜜を、ぜひあなたにも味わってほしいの。同じ幸せを分かち合いたいのよ」

権田が後を続けた。

「誰もが行けるわけじゃない。うわさは耳にすることはあっても入口のわからない、限られたものだけに開かれる、垂涎の禁断の花園だ。そこへのパスポートをやろ。彼女の招待は私の招待でもある。これについてはそちらに拒否権はない」

「……」

「ライブの最終日の翌日、あんたはこの女のところへ行く、そのあと、花園へ行く。ある者にとつては天国、ある者にとつては地獄」
そういうと、権田は俯きがちな社長のほうを見ながら、ゆつたりとシャンパンを口にした。SYOJIは薄桃色に泡立つグラスに口をつけると、テーブルに置いて口を開いた。

「ひとつ、申し上げていいですか。

……今回ぼくがお嬢さんとしたことは、芸能人として以前に人間として最低の行為だったと思つています。そのことについてここで心からお詫びさせていただきます。本当に、申し訳ありませんでした。そう、詩織さんにもお伝えください」

組長は葉巻の灰を落とすと、静かな口調で答えた。

「あのバカ娘も一度こういう目に遭わなければわからん」ともあつただろ。」「

「彼女の怪我は……」

「頬の骨折なら、放置していても治る程度のものだそうだ。ほかに異常はない。もつともそれで済まないような怪我なら、あんたも無事ではいられなかつたがな」

「そうですか……」

SYOは心底ほつとしたような顔を見せた。

「それで、どこへ行けばいいんですか」

「迎えの車に乗れ。花々には香しい蜜が宿る、そして蜜に群れる蜂どもに罪はない。花園の名前を教えよう。ハニー・ガーデンだ。私の口から言つのはいいが、この名は一度とその口から発してはいけない。その薄暗い過去込みで、あなたの命運は私の預かりだ」

……自分という船がどういう波に乗りどこへ行こうとしているのか、十四の時も今も、大してSYOにはわからない。立ち止まろうにも、身の回りの波がいつも激しすぎるのだ。

だが生きぬいて見せる。そうするしかない。たとえ蓋が外れても、嵐の海でも、この身一つで歩いていかねばならない毎日は、昔も今も同じなのだから。

運命が自分に望もうと、どんなに心に毒がたまろうと、絶対に地面だけを見て歩きはしない。喪失の痛みの中で、それだけをSYO しは心に誓つた。

東京最終日のライブは、歌手としての彼への決別を惜しむファンの大声援に包まれて、大盛況で終わつた。

背中を撫でてください

ナメクジ女、栗原澪子宅からSYOJIが解放されたのは毎過ぎだつた。

あちら差し回しの車の、頬に鋭い傷跡のある若い運転手は、SYOJIを乗せる時に発したどうぞ、といつ単語以外何もまだ話していない。尖った顎と鼻、切れ長の鋭い目は、日本人ではないらしいがどこの国かもわからない、異邦の香りを漂わせていた。

全身に、痛みと不快感を伴った疲れをからみつかせたまま、SYOJIは今日の午前中までの異様としか言えない記憶をぼんやりと反芻していた。

「生きてる？」「めんなさいね、こんな目に遭わせて」「

突つ伏したまま髪の毛をつかまれて乱暴に横を向かせられると、クラブ・ホーネットで見たときよりもずっと酷薄な目つきの澪子の顔があった。

「わたし若いころ、けつこうのいい男にレイプされたのね。実をいうと、それから見てくればいい順に若い男はダメなのよ。じじいならまあいいんだけどね。でもあなたみたいな子が完全に理性を失う表情を見るのは大好き。本当に、いたいけでかわいかつたわ」

解放されたばかりの縄目のかに残る手首を指でなぞり、髪の毛が貼りついたままの頬にそつと唇をつけると、髪を撫でながら女は満足そうに笑った。

「何か感想があつたら聞かせてくれないかしら」

小さく息を吐くと、SYOJIは言った。

「傷は……」

「え？」

「少しほ、これで、癒えましたか」「……」

こきなり背中をつつかれたかのような表情をして、澪子は黙った。

「……少しだけ、眠らせて」

そのまますとんと瞼を閉じ、汗で冷えたシーツに頬を落として、夢もない暗黒色の世界に落ちて行った。

「会話をしちゃいけないのかな」

静かな走行音の響く車内で、気を紛らわそうとうよじは傷の男にやんわりと聞いてみた。

「これからのことば、お部屋についたら」説明します

きれいな発音だが、やはり生粋の日本人ではないと思われるなりがつた。

「……説明か。もう、生きて帰れれば何でもいいよ

「」」」氣分が悪そうですね

車窓の風景の流れが完全な二次元に見えて、眩暈とともに気が遠くなるような心地がする。こんなとき、ふと思い出すのはシャラの手触りだ。あいつのそばで丸くなつて毛布を頭から被れば、どんなことがあってもいつでもその空間は優しかつた。自分の呼吸と重なる猫のかすかな呼吸。いつでも胸に当たっていた小さな手。名もない、ささやかな乐园。もう、どこにもない。

「……鴨長明ておっさんは、なかなかいいこといつてるよね」

前に視線を戻して、SYOJIは唐突に口を開いた。

「は？」

「朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。この世は負け犬の死屍累々だ。とりあえず、朝があつて夜があつてまた朝を迎えることに感謝

ミラーのなかの表情のない顔が、ふつと薄く笑つた。

豪奢なマンションの地下駐車場に、車は静かに降りて行った。高級外車の多いそのパークリングには広いエレベーターがあり、珍しいカードキー形式だった。最上階まではこれでないといけないらしい。

ホテル以外にこんな機能があるマンションは初めて見た。

どうにでもなれという投げやりな気分と、これからさらに何を見ることになるのか、という他人事のような好奇心が、SYOU

の中の痺れて痛覚のなくなつた部分を裏側から刺激していた。

十階でエレベーターを降りると、なかばペントハウスのようになつているらしいその部屋ひとつしか、その階にはないようだつた。あとははめころしガラスの向こうに見える、花に埋もれた広い屋上庭園がその階の半分を占めている。

天井まで届くポリッシュドシルバーのドアの脇の呼び鈴を押すと、中からメイドのような風情の女性が顔を出した。男は中国語で何か尋ね、女が早口で答える。続く会話はSYOUには当然なにもわからぬ。ただ、ここは異空間なのだという印象が、その異国の言葉の応酬の中でさらに膨らんでいった。

応接室に通されたSYOUに蓋つきの茶器を出すと、女は頭を下げて姿を消した。蓋を開けると、水中花のように華麗な赤い花が、透明な湯の中にゆらゆらと花開いていた。

向かいに座つた黒ずくめの傷の男は、青白い無表情で語りかけてきた。

「あなたを通す部屋には女性がいます。あなたを接待するのが彼女の義務です。果たせなければ彼女が罰されます。相手がだれか彼女にはわからぬようになつています、そのための目隠しと耳栓です。外す外さないはあなたの自由ですが、それをすればあなたの身元が外にどういう形でばれても責任は負えません。今の仕事とキャリアを失う可能性をお考えください。それでよければお好きにどうぞ。怪我をさせないなら何をしてもかまいません。なお、あなたにはここで起きたことに関する絶対の守秘義務があります、それはあなたの命にかかることと心得てください。何かご質問は

「……」

SYOUはゆつくりと、置みかけられたことの内容を反芻した。

そして、言った。

「つまり、やることはやれと。できなければ罰は彼女にいくと。」
「つちは一向に構わないんだけどそれでいいの」

「彼女がそれでいいと諦めるなら無事に部屋を出られるでしょう」

「……」

「今日一日、彼女はあなたのものです。寝室にお飲み物をお届けしますが、何がよろしいですか。ソフトドリンクもアルコールもありますが」

「じゃあ、ドライ・マティーー。ボンベイ・サファイア・ジン、フランクリンスタイルで」

「かしこまりました」

……かしこまりましたときた。本当にわかつて答えてるんだろうか。

広いバスルームでさつとシャワーを浴びたのち、用意されたバスローブに身を包んで、鏡を見る。口元が痣に染まった疲れた顔。体のあちこちも微妙にいろんな色になっていることだろう。

……果たせなければ彼女が罰される？

手が込んでいる上に変態じみたいやがらせだ。俺のプライドをすたずたにしたのちに花園に放り込んで、それで今度は使い物にならなければ女を罰すると。……勝手にすればいい、罰されるのがこっちじゃないならどうでもいい。あの変態おばはんは俺の醜態を眺めることで十分満足していた、ここで俺がなにをしようとしたなかろうともう大して興味もないだろう。

ドアを開けると、まずバラの香りが鼻孔を占領した。そして、白。階段型の織り上げ天井も壁も、白。レースのカーテン越しに午後の日差しが部屋をほんのりと満たす。隅の花台に、白を基調としたフローラワー・アレンジメントが置かれている。白バラ、スプレーマム、ヒムロスギの取り合わせの、清楚なスタイル。ベッドサイドの白いテーブルにはドライ・マティーーがひとつ置かれている。二つ沈んだオリーブを確認して、注文通りフランクリンなのに少し感動する。

ベッドの中央は人型に膨らみ、枕には黒髪が広がっている。顔は見えない。

近づいて、額から上を眺めたのち、そう、会話はできないのだと思い返してから、SYOUはそつと薄い掛け布団をめくった。そして、驚愕した。

……この子は。

まるでエジプトのミイラのように、両手で胸を抱くようにして、長い黒髪の少女が、薄桃色のシルクのナイトドレスを身に着けて横たわっていた。

黒い杣榔度の田隠しをされ、その唇は閉じられていたが、ひと目見ただけで昨日のフルートグラスの少女だとSYOUにはわかつた。その体の緩やかな起伏も鼻梁から顎にかけてのうつくしい稜線も、まるで堀り起こされたばかりの女神像のように神々しい。SYOUはしばらくつづくとその全身を、なにかの作品のように眺めたのち、ただ思った。

会話がしたい。触れるより会話がしたい。きっと彼女もそうだろう。この全身が、そういうている、そんな気がする。

でも、それは許されないのだ。

ベッドのふちに座り、手を伸ばす。少女の頬に触れてみると、びくりと指の下で反応があり、たゞ波のような衝撃が少女の内側に広がるのがわかる。

それから、唇。和らかに優しい、小さな枕のような感触。幽かに口元が開いて、指の行く先を追う気配を見せる。そのままゆっくりと指先で、唇の上を一周する。上下の唇の間で人差し指が止まると、内側からあらわれた小さな舌がそつと指の腹に触れた。小動物の巣の中の、母を待つ赤子のように。

髪を撫でてみる。指を開いて、その綿糸のような感触を五本の指に存分に味あわせる。かすかに開いた少女の唇から、音にもならぬい幽かなため息が漏れる。胸の上に重ねられた少女の指を握る。指先をずらし、隆起した胸の突端に触れてみる。あ、とため息とも喘ぎ声ともつかない小さな音が漏れ、少女の膝がかすかに上がる。二つのふくらみが、荒くなつた呼吸とともに緩慢に上下し始める。SYOJIは手を離し、額に手を当ててしばらく考える風にした。そして決心したように唇を引き結ぶと、いきなり手を降ろして彼女の耳栓を外した。どこから見られているかもわからないので、シーツに隠し、わからなこよつて。

少女は驚いたように身じろぎし、耳に手をやつた。SYOJIは耳元に口を寄せて、小声でささやいた。

「……正直に言おう。僕はやつぱりこれ以上何もしたくないんだ」少女はこちらに顔を向けると、驚いたように唇をかすかに開いた。「好きでここに来たわけじゃない。別の出合い方をしていたらそれは違つたかもしれないけれど、こんなところでこうかたちでみみたんな子と関係を持つたら、ひとつして一生立ち直れない気がする。でも、何もしないと、きみは罰されるんだろう。それは嫌だ。僕はどうしたらいい」

リンはSYOJIのほうに顔を向けたまましばら黙つていた。ゆつくりと手を上げ、白い指を探るように伸ばすと、SYOJIの頬に触れた。

そしてそのまま細い腕がゆつくりと、SYOJIの首に回された。SYOJIが手を添えると、リンはしがみつくよつてして耳元に口を寄せた。甘い吐息に小さな声が続いた。

「……シヨウ」

「うん」

「あなたなのね」

「うん」

田隠じの下から、少女の頬をすうりと、透明な涙の雫が零れ落ち

た。首に回された手にぎゅっと力が込められた。

「わたし、あなたに、……あいたかった。

あなたが好きだった。ここで、あなたを待つてた。あいたかった。
あればもう何でもよかつた。やつと、この時が来た」

SYOJIは驚いて聞き返した。

「あのとき、言つていたのは、じゃあ……」

「わたしも、あなたとなにかしたかったわけではないの。ただ、本当にただ、あなたにふれたかったの。こんなふうに

SYOJIは絶句した。

「きみ、……いくつなんだ。本当に僕に会つたけにこにいいるのか。嘘だろ？。どうやってこんなところに。だって、この場所は

……」

「……よかつた」

「よかつた？」

「あなたがそういうひとで、よかつた」

「……」

リンの唇の両端が、初めてかすかに上がった。

「わたしは、あなたを思うことだけで、生きてきた。わたしの人生にはほかになにもない。あの日あなたに会つたあと、涙が止まらなくて困つた。生きてきていちばん、嬉しかった。

ここでこんなわたしをみられるのはいやだけど、わたしを拒否するあなたでいてくれて、うれしい。だから、会えてうれしい」

SYOJIは沈黙してただ少女の顔を見た。そして口を開いた。

「いまからでも、きみの故郷に帰れないのか」

「もう遅い。わたしにはもう家も家族もない。国籍もない。この世界から出られない

「え……」

「いいの。わたしは、いいの。ここでいいの。なにもつらくないの」

「いいわけないだろ？。僕に会いたくてここに来て、そしてこれで終わりでいいなら、どうやってきみはこれから生きていくんだ」

しばらく口を閉じて考えたのち、リンは静かにいった。

「きょうの、この瞬間を思うだけで、あと的人生を生きられる」

「……」

空砲のような衝撃と、

驚きと、かなしみと、そしてそれに続く未知の怒りと嫌悪感が一気にSYOJIの胸に押し寄せた。

「……わたしのことは大丈夫。なにもしないでくれて、ありがとう。あなたが幸せでいてくれれば、わたしは幸せ。だから、もう、いい」しばらく考えると、SYOJIはリンの頬に掌を寄せ、そして拒否する間もなく、いきなりその枇榔度の目隠しをほどいた。

「あ」と小さく声を出すと、リンは顔を覆うようにした。

「今日だけを思つて生きていくな、ちゃんとこっちを見て」

「だめ、慣れていないと。誰の顔も見なかつたから、わたしは」こ

にこつしていられたの」リンは両手で顔を覆いながら言つた。

「きみは僕相手に恥ずべきことをするわけじゃないし、僕も同じだ。今日の記憶だけで生きるなら、ちゃんと顔を見て。僕も忘れないか

ら

顔を覆つている両手を、SYOJIはそつと握つて退けた。あの夜、クラブ・ホーネットで見たときよりも近く、本当に近くに、二人の顔はあつた。深い森の奥の泉のようなく、不思議な煌きを宿す鳶色の瞳。その中に、初めて見る花を覗きこむような、自分の顔があつた。

「……ショウ、どうしたの。誰かに殴られたの？」

「大したことじゃない。少し喧嘩しただけ」

リンの細い手がそつとSYOJIの口元の傷を撫でた。

「あのね。ひとつだけ、おねがいがあるの」

「……なに？」

鈴のような声を震わせながら、リンは言つた。

「じかにわたしを抱きしめて、背中を、撫でてください」

「……背中を？」

「それが、たつたひとつなの、夢でした」

SYOJIはバスローブから腕を抜くと、たくましい上半身をあらわにした。リンも目を落とし、すっと夜着から腕を抜いてまっしろな上半身をさらした。豊かな乳房がこぼれ出て揺れた。

ふたりとも、初めて異性の肌を見るローティーンのよう、胸の内を震わせながら未知の熱に導かれていた。リンはそつとSYOJIの胸に耳をつけると、長い睫に縁どられた瞼を閉じて、うつとりとその鼓動を聞いた。とん、とん、とん、小さな声でリンは嬉しそうにSYOJIの鼓動を数えた。

そのまま背中へSYOJIはゆっくりと両手を回した。静かに、やわしく、宝物を包むように。そしてふたりで、横になつた。

「ああ」

ひとのような、何かの動物の鳴き声のような、風のような、ささやかなため息が彼女ののどから漏れ、そして一度とまつていた涙が、今度は咳を切つたようにほろほろとこぼれつづけた。暖かな大理石のようない手触りの背中のカーブを撫でながら、何か言おうとしたわけではないのに、SYOJIの口から自然に、その言葉は漏れ出していた。

「……いい子だね」

リンは、驚いたように唇を開くと、細い腕に一層力を込めてそのたくましい体にすがりついた。

「ほんとに、きみは、いい子だね……」

泣くようなリンの声がそれに続いた。

もうこちぢり。おねがい、ショウ、もうこちぢり言つて……

隣室でモニター画面をじっと見ていた傷の男は、禁じられた会話と彼女の慟哭を聞きながら、細い指で無意識に自分の唇の上をたどつていた。そして下を向いてじぱりへ考へたのち、モニターのスイッチを切つた。

背中を撫でてください（後書き）

* フランクリン…… オリーブを一つ入れたドライ・マティニー

落花流水（前書き）

一日に一度のペースで固定しようと想います、これからもよろしく。

^ . 1 3 8 9 9 7 — 1 0 9 4 <

社長からは、一週間の休みが寄越された。

「とにかくひとまずリセットし、そして休みが明けたら真っ白な状態になって出でこい」

伝言はそれだけだった。SYOJはありがたく好意を受けとり、食料を買い込むと部屋に閉じこもった。

窓脇のベッドに寝転ぶと、四角く切り取られた空ばかりが深く美しかった。思い出せば、昔自分一人では手に余るほど傷つくり、一人ぼっちの部屋でよくそつやつて過ごしていた。飛行機雲、鳥、星に太陽に月、二十四時間をひと区切りとして明から暗へ、暗から明へ、自在に移り変わる窓枠の中のキャンバス。

「仰せに従つて彼女の耳栓を取つて会話をした。ほかの客の情報とか余計なことは聞いてない。自分の不利をいとわないなら自由だと君は言ったよね」

「その通りです」

ハニー・ガーデンでの傷の男との会話が、留守電の再生のように耳元に蘇つてくる。

「じゃあこのことで彼女にペナルティが科せられるようなことは…」

「ありません。重要なのはここでの出来事に関するあなたの守秘義務のほうです」

「彼女はここから出られないのか。同じ境遇のほかの女性たちと同様に？」

「お分かりだと思いますが、そういう質問には答えられません」

SYOJは表情の読めない、背の高い蒼白な男の顔を見つめた。

「彼女を憐れと/or/いますか」

逆に質問されて、SYOJはとまどつた。言えることはひとつだ

けだった。

「ここにいるのが僕のせいだというなら、……ただ、残念だ」
男は口元を少し緩めると、言った。

「あなたはまたおいでになる」

「なぜそう言える」

「彼女を抱いて、一度来なかつたお密はいません」
SYOJIは顔を上げて、まじまじと男の顔を見た。

「申し遅れました、私はヤオ・シャンと申します。彼女を憐れにお思iになるなら、どうぞ、また当ガーデンにお越しください。なんの慰めもない人生に、あなたの存在だけが光になるでしょう。お次の機会には、リンが手塩にかけた空中庭園のお花も御覧に入れましょう。あなたが心から彼女を思つてくだされば、もしかしたら彼女の運命も変わるかもしません」

謎のような言葉を繰り返し廻り、自分の鼓動のみを聞いているうち、体と体を起動させる脳味噌がすべての労働を拒否し始めた。何も考えたくない、忘れない、ただ眠りたい。いつが始めとも終わりともつかない、散漫な眠りと覚醒。その繰り返しにゅっくりと全身が引き込まれてゆく。

悪夢は間断なく訪れた。

刺激には耐性があるほつだと自覚していた自分の心身にも、さすがに限度があつたらしい。生々しい感触、破壊された感情、永遠とも思える時間の間ひしやげていた自分自身、繰り返す痙攣と陽物と強制的なエクスタシーのイメージ、それはそのまま遠い過去の、同じ感覚の記憶へと数珠のようにつながつてゆく。

「こんなことぐらいで自分は変わらない、こんなことぐらいで。呪文のような言葉は自分の中に刻印されたものだつた。そこに、あの声が響いてくる。

SYOJI、ゆずきしようた。

たつた十四で、母親と共に謀して実の父親を殺した……

言われてみればその通りなのに、あのとき、聞いてびっくりしている自分自身にびっくりしていた。

……こんなことも自覚せずに、自分はのうと生きてきたのか。事実、言われてみればその通り、自分は母親と共に謀して父親を殺したのだ。そしてその父親も、良心のかけらもない人殺しだった。だがどうすればこの宿命から逃れ出しができたのだろう。明るい日差しの中で多くの人に囮まれているとなおさらには、薄い舞台装置を倒せばその向こうでぱっくりと口を開ける闇の気配をいつも感じていた。行き場はない。昔も今も。あさに夢の中で目を閉じて、この舞台からの出口を探す。

そのうち、あたまの中をひやひやとした何かが流れだした。その感覚の中に身を沈めていると、いつしか自分の体は丸ごと、その無音の流れの中にあつた。

うすあおい、サファイア・ブルーの水が眼前を満たし、自分が見上げているのが水面だと知る。その水面に、どこから降つて来る、フランジパニに似た花がうすももいろの影を作る。ぽたり、ぽたり、ぽたり。ああ、自分は川の中を流れているのだ、と思う。

その画面の中に、やがてすうっと人影がさす。こちらに顔を向けて、目を閉じた全裸の髪の長い少女が、うつぶせで流れてくる。

……リン。

細い腕は流れに揺蕩い、ふわりふわりとこちらに延ばされている。蝶人形のような顔の周りを長い髪が生き物のように渦巻く。しばらく向き合いながら、ともに流れてゆく、その冷たい感覚。さあさあと頭の中で音がする。脳みそをながれる體液、全身を巡る血液、神経の中の電気信号の、視覚と聴覚の幻。

ああ、流れる速さを、同じにしなければ。彼女と、この花ばなと。水の外から、哀切な音色が流れてくる。……あれは、二胡に簫、それから、秦琴か。

楽団が近づいてくるように、音色はだんだん大きくなる。水面が

急に明るくなり、きらきらと鮮やかな光が乱反射したと思うと、少女の体は材木のようになぐりと反転し、背中をこすりに向かっての花かたまりがはらはらと散華して薄紅が舞う。手を伸ばす、あれ、手がない。俺のからだはここにないのか。じゃあどこへ？視界が揺らめいて、少女の体が消えると同時に音楽も止まった。水面に向かつて気持ちだけもがくうち、視線が一線を越えて、水の外に出た。

広い、広い川の上に、赤い提灯をずらすと灯した祭り船が遠ざかってゆく。幽かに音色が聞こえてくる。リンはあの上に引き上げられたのか。呼ぼうにも実体のない自分からは声が出なかつた。だめだ、もう届かない。薄い霧の中に船は消えてゆく。果ても見えない。視界はただ霧の中に滔滔と流れる川だけになつた。

と、そのとき。遙か彼方から、ちいさな悲鳴のよつた鳴き声が聞こえてきた。

「あーお。 あーお。 ああああ。

……シャラ！

おまえ、どこにいる？

電話にもメールにも出なくなつたSYOJIを心配して北原哲夫が部屋を訪れたのは、休み明けを一日後に控えた午後だつた。

生活感のない冷えた部屋のベッドにただ寝転がるSYOJIを見て、彼は最初にそつと呼吸を確かめた。頬に触れ、名前を呼ぶと、SYOJIはゆっくりと切れ長の目を開けた。そして眼前に大写しになつている哲夫の顔に眉をしかめ、また眠ろうとする。

「こり、寝るな。もう十分だろ？」哲夫は頬を乱暴に叩いた。そして持参した栄養ドリンクやレトルト食品やから揚げやコロッケをサンドイッチブルににぎりずら並べてただ一言、

「食え」といつた。

SYOJIは一分ほどそれらを無言で眺めた後、

「……どうも」とひとと言ひつて、まずスポーツドリンクを飲み、桃の缶詰から静かに食べ始めた。

「いつから食つてないんだ」

「よく覚えてない」

「あれからどこにもいってないのか

「ずっとここにいた」

「病気か、お前。どうしたんだ」

「わからない、ただやたら眠くて、ずっと寝てた

「……」

何も言わず事務的に食べ物を口に運ぶSYOJIにひと言

「うまいか」と聞いてみると、

「今考へてるとこ」と言ひつてから、から揚げに手を伸ばした。

ひと口食べて、「あ、うまい」とつぶやいてSYOJIが目を上げると、目の前の哲夫はほりつそくを吹き消すよつな長いため息をついた。

た。

久しぶりに顔を出してみれば、事務所はいつも通りだつた。

音楽活動を止めた以外、キャンセルになつた仕事も反故にされたものもなく、表面上は事件前と何も変わらずに時は流れていった。

イメージモデルをしているアパレルメーカーのキャンペーンの仕事、子供向けアニメのナレーション、雑誌のコラム、出演する携帯ドラマの下読み。

あの事件について、そして接待だの花園だのについて、社長ももちろんスタッフも口に出すことすらしない。あれほどの騒ぎが、SYOJIにとっては、まるで自分の身にだけ起きたなにかの幻のように思えた。

変化は、SYOJIが所属するレコード会社のHPから彼の名前が消え、かわりに鳴り物入りで伊藤詩織が音楽デビューしたことだつ

た。事件後、怪我が癒えるとすぐ、あらかじめ準備されていた詩織の歌手活動は広範囲に展開され、SYOJIの抜けた穴は順次詩織がカバーしていく形になった。

そのころからメディアで詩織の姿を見るたびに、SYOJIの頭の中で能天気なBGMが流れるようになった。

オクラホマミキサー、別名、藁の中の七面鳥。

理由を考え、思い当たつたとたんSYOJIは苦笑せずにはいられなかつた。

ああ、そうか。……こいつは、幼稚園の「椅子取りゲーム」のとき、いつも流れていった曲だ。

「あつという間に、もうこんなですよ」

新入りのスタッフが抱えてきた段ボールには、歌手活動中止宣言をしてから倍に増えたファンレターやプリントアウトしたメールがどつさり入つていて。

「ありがとう」

ひとつひとつ手に取り、目を通してゆく。

どうして歌手やめちゃうんですか。続けてください。

一時的なものですよね？ ただのお休みですよね？

ライブがなくなつたら、直接会う機会が減つちゃう。寂しいです。寂しそぎます！

……あんな歌を、ほんとにそんなに聞きたいんだろうか。

ありがたい、済まないと感じると同時に、SYOJIは他人事のようにそう思わずにはいられなかつた。

簡単に受け入れられ、軽く消費されていくような、自分の歌はそんな口当たりのいいものだつたんだろうか、本当に？

明日で世界が終わりでも、金かね金金金寄越せ
！！

カバが死ぬ！カバが死ぬ！インドのどこかでカバが死ぬ！いな

いはずのカバが死ぬ！

バカの群れの中でカバが死ぬ！

棘のような視線だけを残して火を浴びて、この身を燃やせば思
いはかなう……

「社長がお呼びです」

入つて間もない、雑用係をおもにやらされている新人の女優が呼
びに来た。手紙の束を置くと、無意識にカバの歌を口ずさみながら、
SYOJIは社長室に向かった。

「けつこうあれから頑張ってるな。で、CMの仕事が来てるんだが、
今度は大手だぞ。風邪薬のS社と、外食産業のR
赤ラークに火をつけながら、関岡社長はぐぐもつた声で言つた。

「…………す”い。…………ですね」

あれは口約束ではなかつた。自分のしたことがどこでどうつなが
つて、その仕事をもたらしたのか、混乱する頭で追つ間もなく、社
長は言つた。

「これからはますます身辺に気を付けて、騒ぎを起こさないように
しなくちゃな。まあ、ああいうことがあつた後だからなおさら大丈
夫だと信じてはいるが」

「…………」

「どうした」

「それって、契約期間は…………」

「どちらも一年」

SYOJIはななめ上に視線を投げた。

「おい、何を考えてる」

視線をふつと社長に戻す。

「お前、まさか、一年以内にどうこう……とか考えてないだらうな
「俺、芸能人に向いてないと思うんですね」

「なんだ今さら」

SYORIはソファに背を持たせるようにして、真剣な顔で社長を見た。

「たくさん手紙をもらつても、ありがたいとあまり思えない。最後の最後でも、やっぱり感慨も何もなかつたんですね」

「だから?」

「少人数のライブハウスで観客にダイブとかしてる時はあつたんですけど。聞いてくれる側に届いてる、という一体感というか充実感が。でも、今は……。」

人に金もらつて生きる限りは、自分の歌を聞いたり芝居を観たりしてくれる不特定多数の人に対する基本的な愛情がなければだめだと思うんですね。その人たちに大切な何かを届けたいという意思が。俺にはそれがない。資格がないと思う」

「そんなもんだ。お前は厳しすぎるんだよ、自分の感性に対しても、ファンへの愛情なんて半分以上はフェイクでいいんだ」

「でも。……本当にファンのことを思つて、愛情をもつて接することができる誠実なタレントもいる。いるんです。彼らにとつては、歌はファンへのプレゼントなんだ。でも……」

口を開いてから言いよどみ、SYORIは思い切つたように先を続けた。

「自分としては、自分の歌は、なんていうか自分のヤバい部分を恐れながら生きてきて、その解放区だった。そのままで外に出せない、世界と自分とのずれに対する恐れと怒りというか。

愛とか絆とか理解という耳に優しいことばにいつも苛立つて、それを自分語に作り替えて叩きつけてた。結局、自分の為のものだつたんです」

「……で?」

だが芸能界という世界は何でも大口をあけて飲み込む。その歌を

商品としてルックスとセットで取り込んだのちに、SYOのイメージは一つのキャラクターに置き換えた。

「かつこよくて危なそうで理解不能でステキ」

何をやっても歌つても、すべてはそのひととに吸い取られてゆく。アイドルというオブリークトが、自分を包み込んでどうしてもほじけてくれない。

「うつても、過去は変えられないのに。」

「だがそんな思いを受け取ってくれる気が、社長にはさうもないのは表情を見れば明らかだつた。SYOはほつりと言つた。

「いつも、思つてた。」

俺には、ここにいる資格がない。そういう身分じゃない。

「これ以上仕事を広げると、かえつてまわりに迷惑をかけるような気がするんです」

「社長はじつとSYOを見ると、言つた。

「もしかして、過去のことを気にしているのか」

「……」

社長は灰を落とすと、サングラスの向うの目を和らげて言つた。「お前、勘違いしてないか？　自分を人殺しだとか人殺しの子だと決めつけて、歪んだヒロイズムに醉つてないだろうな。」

「いいが、お前は当時十四歳だつた、そして母親を拉致して連れ回していた犯罪者から母親を守つたんだ。それが事実だ。その男が血縁のお前の父親だという確証もない。結果的にその男が命を落とすことになるうと、お前に罪はない。だから許された。一応隠してはあるが、メディアだつて見て見ぬふりをしてくれている部分もある。世間の恨みを買って 餌食にならない限り、それはお前に対する刃にはならない。」

「いいが、愛されることだ。世間に愛されていれば、同じ過去でも世間は同情を持って見守る。叩かれる側になれば、それは付属物をつけた武器になる」

「……」

「一つ付け加えさせてもらえば、お前は事務所に与えた損害も忘れてはいないよな？ それをきちんと返していくのがお前のこれから の義務じゃないのか。お前には自分でも自覚していない魅力と才能が まだまだある、それをこれからは生かして行け。特にCMはまたと ないチャンスなんだから、きちんとこなせよ」

「……はい」

ぐうの音も出ないままYOSHIOは部屋を出た。そして足元を睨ん だ。

……愛されろ？

愛することもできないのに？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1708ba/>

酔迷宮

2012年1月13日18時53分発行